

〈史料紹介〉

東京感化院関係史料集 (18)

古字田 亮 修

はじめに

当研究所では、平成一六年（二〇〇四）六月より社会福祉法人・錦華学院の所蔵史料調査をおこなってきた。その調査において、錦華学院の前身であり、日本で二番目に開設された感化院である東京感化院に関する一次史料を多数確認の上、整理、撮影することができた。以来、研究所では『感化院事業の社会史的研究』（平成一七〜一九年度）、『東京感化院の総合研究』（平成二〇〜二二年度）という課題目で共同研究班を組織し、日本私立学校振興・共済事業団の学術研究振興資金の交付を受け（平成一七〜二〇年度）、その全容解明に向けて研究を進めてきた。

これら史料のうち、院の運営を知る上で最も重要とみなされ、また全体の分量の半分あまりを占める日誌類全四一冊については、『東京感化院関係史料集』（1）〜（14）（二〇〇六〜一〇年）に翻刻を公開した。そして、（15）（二〇一〇年）では、規則類を翻刻収録し、（16）（二〇一一年）では、『東京感化院月報』の一号から三一号のうち、錦華学院において欠本となっている八冊を除いた二三冊を翻刻収録した。さらに、前号の（17）（『長谷川仏教文化研究所年報』第三七号、二〇一三年所収）に

おいては、『東京感化院月報』の三二号より五五号のうち、欠本となっている四九号と五二号を除いた二二冊を復刻収録した。本稿では、五六号から六六号の月報のうち、錦華学院において欠本となっている六五号を除いた一〇冊を復刻収録するものである。なお、五六号に一頁、六六号に二頁の欠落がある他、数カ所に切抜部分が存在する。

今回、復刻を収録する一〇冊の月報は、明治四〇年（一九〇七）一月より明治四一年一月の二年間にわたる時期の発行であり、編輯兼発行者は岡西繁三郎、発行所は羽澤文庫である。この時期の東京感化院は、静岡分院・家庭農業苑開設（明治四〇年二月一日開院式）の時期にあたり、月報においてもこれに関する話題が度々取りあげられている。月報五六、五七号によれば、第二代院長高瀬紹卿は、明治三九年二月一日に近藤輔宗を訪問し、農業部設置に関して相談したところ、同氏が所有している静岡県田方郡三島付近の地所と家屋を無条件で提供することを申し出たという。そして同年二月二〇日に鈴木充美弁護士との立会いの上、同氏と契約を交わし、静岡分院の敷地になったという（静岡県田方郡錦田村字川原ヶ谷、反別二町五反七畝十三分、家屋二棟・建坪七十坪余）。その後、静岡分院がいつまで存続していたかは、明治四二年以降の月報が現存しないため現時点では不明であるが、明治四五年六月に高瀬真卿が東京感化院を佐野前励師（日蓮宗事務院総監）に譲渡する頃には、感化院としての機能を停止していたものと推測される。<sup>(1)</sup>

（当研究所専任研究員）

## 註

（1）その後も、高瀬真卿は別宅として使用していたようである。青木とみ「彼のころ」原稿（掲載誌名不明、執筆年不明（真卿没後）、淑徳大学アーカイブズ所蔵）参照。